The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪大学の道程 ： 大阪大学略史
Author(s)	三谷, 裕康
Citation	大阪大学史紀要. 1982, 2, p. 13-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7968
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学の道程

――大阪大学略史――

三谷裕康

一　はじめに

司馬遼太郎の小説『花神』の冒頭に、昔大阪の北船場にあった蘭医学の「適塾」が国立大阪大学の前身ということになっており、大阪大学は私学だけが持ちうる校祖を持つ、と書かれている。

適塾の建物は現在でも保存され、重要文化財として大阪大学が管理している。塾祖緒方洪庵の号が適々斎であったので、その頭文字をとって適塾と称したといわれている。昭和五十二（一九七七）年放映されたNHKの大河ドラマ『花神』の初日に登場した適塾のセットは現場をよく再現していたと思う。

昭和四十七（一九七二）年文部省発行の『目で見る教育一〇〇年のあゆみ』では、幕府の昌平坂学問所を原点とする文部省の成立、同じく幕府の開成所及び医学所を母胎とする東京大学の設置など、首都を中心として編集されているが、関西関係で掲載されているのは、適塾と官立大阪中学校だけである。しかも適塾が大阪大学の前身であり、大阪中学校が第三高等学校から現在の京都大学教養部に移行した経緯には触れていない。

洪庵が幕府の奥医師になったのは文久二（一八六二）年八月であるから、養子拙斎が医院を継ぎ、適塾は閉鎖同然となり、教育機関としての機能が復活したのは、維新直後の明治二（一八六九）年二月大阪府が大福寺に仮病院と医学校を設置し、院長に洪庵の嗣子惟準を江戸から迎えた時である。その間七年の空白がある。

大政奉還三ヵ月後の慶応四（一八六八）年正月三日鳥羽・伏見の戦から戊辰戦争が始まり、二条城から大坂城へ移っていた徳川慶喜は、六日に脱出して十二日に江戸城へ着いた。二十三日には実力者の大久保利通が大坂遷都を建白した。古都八七四年の因習を打破する意味で、民から慕われた仁徳天皇の難波高津宮に肖り、開かれた新政府を大坂に求めようとした。しかるに、公卿らの反対にあい、遂に大坂は幻の都で終った。

大化の改新六日後、日本で初めて中国流に元号を採用したのが大化元（六四五）年六月十八日であり、第三十六代孝徳天皇の難波長柄豊崎宮に始まる。それから一二二三年後、明治維新の改元も浪速大坂から

宣せられようとしたのであるが、一八六八年九月八日明治に改元後、天皇は二十日に京都を発ち、十月十三日江戸城に到着、東京城と改称して皇居と定めた。十二月二十二日一旦京都御所へ帰還、東京奠都は明治二年三月二十八日であった。なお戊辰戦争が終結したのは函館五稜郭開城の五月十八日である。

新政府が幕府の昌平黌と医学所を復興したのは、上野戦争終結後の慶応四（一八六八）年六月下旬であったが、なお東北戦線と北越戦線が酣な時であり、江戸では学問をするような雰囲気が無かった。したがって政府は同年七月に旧幕府開成所の理・化学教場を、未だ遷都の夢去りやらぬ大坂に移し、舎密局を設置した。本家の開成所が東京で復興したのは明治改元直後の九月であるから、当時大坂のほうが高等の理科教育で一歩前進していたのである。

慶応四（一八六八）年閏四月二十一日、新政府は政体書を制定、地方を府藩県に分けた。同年七月二十二日から明治二年二月三日までの約半年間、後藤象二郎が大坂府知事となる。彼は坂本竜馬の所謂「船中八策」を採用し、若干修正の上、先代土佐藩主山内容堂（豊信）を擁して、徳川慶喜に大政奉還を決意せしめた維新の立役者である。その功により彼は大坂府知事に抜擢されたのであろう。当時なお廃藩置県以前であるから、大坂府知事の地位は大名格以上のものであったと思う。因に隣の兵庫県知事は伊藤博文であった。

舎密局の設置に呼応して、後藤知事は日本で最初の総合大学を大坂に設置する構想を抱いていたが、東京奠都後、開成所の復興に政府が全力を注ぐようになったので、幻の都における総合大学も幻のように消え、大坂府仮病院と医学校だけが、総合大学実現の悲願を約六十年後に達成する温床となる。

二　前　史

㈠　適塾

緒方洪庵は諱を惟彰と称し、備中（岡山県）足守藩士の父が大坂蔵屋敷の勤務となった折に十六歳で来坂した。十七歳から四年間中天游の思々斉塾で蘭学を学んだ後、江戸と長崎で蘭方医学を修め、天保九（一八三八）年二十九歳の時に、大坂の瓦町（北御堂の北）で医院を開業すると共に蘭学の適塾を開いた。天保十四年には過書町（北浜三丁目）に移転、文久二（一八六二）年洪庵が幕府の奥医師に任ぜられるまでの二十五年間に、登録門人数六一二名、無登録者を合せると、門弟数延三〇〇〇人を越す日本一の蘭学塾となったのである。しかるに洪庵は、出府一年も満たぬ文久三年六月十日に、大喀血を起し、僅か五十四歳の若さで急逝した。全く江戸へ死にといったも同然である。

門人に医者が多いのは当然であるが、医者以外で有名になった門人も多い。

医者で有名なのは、洪庵の義兄弟（高弟のために姓を貰う）であり、山内容堂候の要請により土佐開成館の教頭にもなった緒方（大戸）郁蔵、医院と塾とを継承した養子の緒方拙斎、両名は維新直後大坂府仮病院と医学校の医師兼教官となり、院長の嗣子惟準を補佐して適塾の伝統を守った。

幕府西洋医学所の第二代頭取となった恩師洪庵のもとで、教授職として仕えた島村貞蔵と池田謙斎、両人は西洋医学所が新政府の医学校から大学東校と改名された時にも教授職を続け、さらに東京大学医学部へ転化した折、綜理に昇進、綜理心得には適塾出身の長与専斎が、長崎医学校校長の経験を買われて、内務省の初代衛生局長から抜擢されている。

異色なのは、昨年のNHK大河ドラマ「獅子の時代」に登場の高松凌雲である。幕府の奥詰医師であった彼は、新政府に仕えず、貧民施療のために東京で同愛社を設立した。

医者以外では、先ず大村益次郎（村田良庵）を挙げねばならない。彼は本来村医であるが、塾頭に選ばれるほど蘭学に勝れていたために、兵術者として長州藩に抱えられ、戊辰戦争では、西郷に代って、彼が官軍の総指揮をとり、東北、北越、函館と徹底的に幕軍を攻めた。江戸戦線から敗走の幕軍を率い、榎本武揚を総裁とする函館五稜郭で、官軍に抗した大鳥圭介も適塾の出身である。陸軍の総師として二人の適塾出身者が、官軍と幕軍に分れて干戈を交えたのも奇妙な縁である。

五稜郭開場後、大鳥は投獄されるが、赦免されて新政府の開拓使となり、栄進して工部大学校（東大工学部の前身）の校長などを歴任、さらにアジアの外交官として大いに活躍した。

後藤象二郎

戊辰戦争終了後、兵部大輔に昇進した大村は、徴兵制を立案、陸軍造兵廠などの諸施設を大坂に置くことを計画し、明治二（一八六九）年八月実地視察のために上洛したが、徴兵に不平を持つ士族の刺客に襲われ、重傷を負い、京都から大坂府病院へ移された後、敗血症を併発し、遭難二ヵ月後に死亡した。享年四十五歳であった。

敗軍の将大鳥が八十歳の天寿を完うし、明治新政府に貢献したのに、官軍の将大村が明治時代に彼の本領を発揮できず、未完の大器として、靖国神社の銅像で終ったのが侘しい。

大村より一年後入門した佐野常民は、日本海軍の創設に携ったが、後に日本赤十字社を設立した。さらに一年後輩の菊池（箕作）秋坪は美作（岡山県）津山藩の侍医を勤めた後、蕃所調所（後に開成所と改称）の教授職となる。後世東京帝国大学総長と文部大臣を歴任した菊池大麓は彼の次男である。

二十六歳の若さで安政の大獄に散った橋本左内の入門はさらに一年後である。彼は主君の松平春嶽に協力して、水戸系の一橋慶喜を第十四代将軍に擁立し、紀伊家の慶福（家茂）を推す井伊大老と対立、投獄されて刑死する。しかるに家茂を継いだ第十五代将軍の慶喜が、やがて、官軍から追討される身となるのは皮肉な運命といえよう。

福沢諭吉は天保五（一八三五）年に豊前（大分県）中津藩蔵屋敷（阪大病院西端）で生れたが、翌年父の急死により、母に抱かれて一兄三姉と共に帰郷する。安政元（一八五四）年諭吉二十歳の時長崎で蘭学を学ぶ。翌年江戸遊学の途中、亡父と同じ蔵屋敷へ勤務している兄を訪問したが、兄の勧めにより江戸行を中止し、適塾の門に入る。最初の一年間

福沢諭吉誕生地の碑（大阪大学医学部附属病院南）

屋敷から通学したが、翌年彼が腸チフスに罹ったり、兄が死んだりで、帰郷が重なる。年末近くに上坂して、適塾に住込み、爾来本格的な勉学が二年続く。

当時の充実した勉強と天衣無縫の塾生活は『福翁自伝』に詳しく述べられている。「緒方の書生は、江戸に学ぶものなく、教えることあるのみ。また目的なしに苦学したので、江戸の書生よりもよく勉強できた。」と塾頭にまでなった諭吉は、自信たっぷりに、適塾を礼讃している。

安政五（一八六八）年藩命により、彼は江戸屋敷で蘭学塾を開くことになり、十月中旬に築地鉄砲洲の奥平家中屋敷で開講する。慶応四（一八六八）年四月には新銭座に移し、年号に因んで慶応義塾と命名した。時に江戸は戊辰戦争の最中であったが、超然として勉学できたのは慶応義塾だけであったと言われている。

溯って考えて見れば、緒方洪庵が適塾を開いた天保九年は、大塩の乱一年後、蛮社の獄一年前である。当時危険視されていた蘭学塾が、物騒な時代に大坂で根を下し、日本一の塾に発展し得たのは、長崎や江戸と異なり、商都大坂が政治の真空地帯であったからであろう。

洪庵の離坂後、養子の拙斎が医業を継承し、塾生をとったのは最初の二年に過ぎず、明治中期まで医院を継続した。その後次男惟準が数年、六男収二郎が三十数年居住し、大正十二（一九二三）年から華陽堂病院に貸与していたが、昭和十六（一九四一）年文部省の史跡指定を受け、翌年大阪帝国大学へ移管された。戦災も受けず、原状が保存されている。昭和五十五（一九八〇）年文化庁による補修工事も完了し、観覧が自由となった。

(二) 舎密局と医学校

慶応四（一八六八）年七月後藤象二郎が大坂府知事に任命されると共に、旧幕府開成所の理・化学教場を大坂に移し、舎密局と称したのである。新政府から教師として派遣されたハラタマ（Koenraad Wolter Gratama）が、御用掛の田中芳男を同伴、後藤らと協議して、明治元（一八六八）年十月四日大坂城西の空地に舎密局の起工式を挙げた。

同年十二月十四日には、緒方郁三、緒方拙斎、ハラタマらが大坂府仮病院（上本町四丁目大福寺内）の落成式に臨んだ。明けて一月十三日には、上海から大坂府に呼び寄せられたボードウイン（Anthonius Franciscus Bauduin）がハラタマの案内で仮病院を視察し、翌日から診療を始めた。二月末日には、医学校（東京）勤務の緒方惟準を大坂府が仮病院の院長に任命し、ボードウインを教師、緒方拙斎ら六名を医師として、大坂府仮病院が正式に発足する。

いっぽう同年五月一日には、ハラタマを教頭、三崎嘯輔（ボードウインとハラタマの弟子）と松本銈太郎（医学所第三代頭取松本良順の子）とを大助教として、舎密局の授業が開かれた。

十八日には函館戦争も終り、一応戊辰戦争が終熄すると、いよいよ文教の中心が東京へ移るので、この辺で、ハラタマとボードウイン、緒方惟準と松本銈太郎の人間関係に溯って触れて見たいと思う。

文久二（一八六二）年長崎養生所へ赴任したボードウインは、同所内に分析究理所を設け、慶応元（一八六五）年本国からハラタマを招いて医化学及び製薬技術を教授させた。幕府の要請により、翌年ハラタマは助手の三崎嘯輔らを連れて、江戸の開成所へ移ったが、慶応三年には幕府が瓦解したので、翌年新政府の方針に従って、開成所の理・化学教場を大坂へ移し、彼自身が教頭となって舎密局を設立したのである。

慶応二年末任期満了のボードウインがオランダへ帰国する際に、門閥の弟子緒方惟準と松本銈太郎を伴い、両名をユトレヒト大学へ留学させた。しかるに翌年三月に再渡来し、幕府の医学校設立に協力することを約束して、五月に再度帰国している。明けて慶応四年正月三度目の来日をした時に、戊辰戦争が勃発し、江戸幕府が崩壊したので、彼は上海に待避した。オランダに留学中の緒方と松本にも幕府からの送金が絶えたので、両者共に七月日本へ帰還した。

やがて舎密局にハラタマと松本、仮病院に緒方とボードウインが、それぞれ主役と脇役で登場し、四人の綾なす舎密局と仮病院のデュエットが、関西のみならず、日本における高等教育の露払いとなったのは、蘭学浪速の奇しき縁と言わざるを得ない。

仮病院は明治二年七月に代官屋敷跡の鈴木町（現在国立大阪病院の敷地）へ移され、大坂病院と改称した。前述の兵部大輔大村益次郎が九月四日京都で遭難した後、敗血症治療のため入院したのは大坂府病院であり、右脚切断の執刀をしたのがボードウインであった。結局敗血症は好転せず、手術後一週間の十一月五日に大村は永眠した。遺言により、彼の右脚は、天満東寺町の竜海寺において、恩師緒方洪庵の遺髪が埋葬されている墓石の隣に葬られた。竜海寺は洪庵の師中天游の菩醍寺でもあり、三代の師弟が並ぶ墓石は日本における蘭学の縮図といえよう。

明治二年九月大坂府は川崎町に洋学校を設立し、十一月に大坂府病院を大坂府医学校・病院としている。明治三年三月には、舎密局と共に大坂府医学校・病院も国へ移管される。同年五月舎密局は理学所と改称、十月には洋学校が国立となり、理学所を吸収して、大坂開成所と命名された。

東京では、維新政府により復興された昌平学校と医学校とが、慶応四（一八六八）年八月に東京府へ移管され、明治改元（一八六八）直後の九月に旧開成所は開成学校として新政府により復興されたが、十月には東京府の所管となる。しかるに昌平学校は十月、開成学校は十一月、医学校は十二月にそれぞれ政府へ還元される。明治二年六月昌平学校を大学校とし、開成・医学の両校を大学校分局として包含することになる。明治三年には大学校を大学、開成・医学の両校をそれぞれ大学南校・東校と改称した。

明治四年七月大学が文部省となり、翌年八月文部省は全国を八大学区に分ける制度を頒布するが、やがて七大学区に整理する。しかるに文部省直轄学校のある大学区は、第一（東京）、第三（大坂）、第五（長崎）

の三地区に過ぎなかった。

第一大学区(東京)、

医学校(大学東校)→東京大学医学部、

第一番中学(大学南校)→東京大学、

第二番中学(大学南校から分離した洋学第一校)→東京英語学校。

第三大学区(大坂)、

医学校(大坂医学校)×明治五年廃止、

第一番中学(大坂開成所)→大坂英語学校。

第五大学区(長崎)、

医学校(長崎医学校)×明治七年廃止、

第一番中学(長崎広運館)×明治十年廃止。

明治維新の先端を切って高等教育が開花した大坂ではあったが、舎密局は明治三年に閉鎖され、適塾の伝統に輝く医学校も、緒方惟準校長の兵部省転勤により自動的に廃止された。

これを慨いた大坂の財界人鴻池善右衛門、住友吉左衛門など有志三百名が醵金して、明治六年二月津村別院内に大阪府病院を開設した。

ボードウインの後継者エルメレンス(Christian Jacob Ermerins)を始めとして、大部分の医師が帰任し、ボードウインの弟子高橋正純を院長として、病院と医学校が復活した。政府によって廃止された病院と医学校を、府民の実力によって復興した浪速の土根性が頼母しい。

〔註〕学校名で大坂が使用されたのは、府立で明治三年、官立で明治十二年までであるが、市立ではさらに後年まで使用した例もある。

(三) 専門学校時代

東京大学が発足した明治十(一八七七)年以来、東京英語学校は東京大学予備門と改称され、大坂英語学校も大坂専門学校(明治十二年)から大阪中学校(明治十三年)と度々名称を変更し、その性格を模索していたようであるが、太政官制から内閣制に変る明治十八年に、大阪で再び東京大学に匹敵する大学を設立する機運が起こり、名前だけを先取りして、大阪中学校は大学分校と改称される。

四年後の明治十八年末に帝国憲法を発布する前提で、伊藤博文は初代内閣総理大臣に就任、伊藤に共鳴した森有礼が初代文部大臣となる。森は翌十九年三月帝国大学令を制定し、司法省の東京法学校及び工部省の工部大学校を東京大学に併合して、大学院及び法・医・工・文・理の五分科大学を擁する帝国大学を設立した。同時に東京大学予備門を第一高等中学校、大阪の大学分校を第三高等中学校と改称、帝国大学への二大登竜門とする。

明治二十年には第二(仙台)、第四(金沢)及び第五(熊本)の三高等中学校を増設し、森文相の志向する帝国大学の中央集権化が確立する。当時公立医学校は二十三校もあったが、文部省は千葉、仙台、岡山、金沢及び熊本の各医学校をそれぞれ第一、二、三、四及び第五高等中学校医学部とし、十五の公立医学校を閉鎖、大阪府、京都府及び愛知県の三医学校だけが公立学校として残る。

明治二十二年二月十一日憲法発布の朝、式典に出席のため玄関を出た森有礼は、クリスチャンなるが故に、神道を奉ずる復古主義の青年によって暗殺された。しかし森の意図した国家中心の官僚的教育体制は既に達成されていたのである。

大阪府に存在する唯一の官立学校であった第三高等中学校は、狭隘と環境の悪さを理由に、京都移転が明治十九年末文部省により決定され、府立大阪医学校は第三高等中学校の医学部とされることもなく、却って遠隔の県立岡山医学校がその医学部に選ばれた。

取り残された大阪医学校は府会に於てその存廃が審議される破目に陥ったが、明治二十二年四月市制を布かれた大阪市及び堺市と郡部の連帯の所属とし、独立採算制により医学校を維持することに決定、五月の府会で存続が承認された。八月には第三高等中学校の京都移転が完了し、帝国憲法発布の年から皮肉にも大阪に於ける官立学校が一時姿を消すことになる。

当時大阪で設立されたその他の高等教育機関として、明治十三年五代友厚らにより開設された商業講習所は、明治十八年に府立大阪商業学校となり、五年後に大阪市へ移管される。また私立の関西法律学校は明治十九年に設立された。前者は大阪市立大学、後者は関西大学の母胎である。

明治二十六年八月第七代文部大臣井上毅は、帝国大学令を改正し、講座制を採用、各分科大学に教授会を置き、教授会による大学の自治管理を認めた。所謂大学の自治が教授会自治により維持されるようになったのはこの時からである。但し明治十九年に制定された評議会制は残り、総長が最後の決裁をする。この制度は現在の国立総合大学でも継続している。翌二十七年には高等学校令が公布され、五つの高等中学校は高等学校と改称された。

明治二十七～二十八年の日清戦争終了後、戦勝国の日本に工業勃興の機運が高まり、文部省直轄の東京工業学校（明治十四年第六代文部卿福岡孝弟により設立された東京職工学校を明治二十三年改称したものであり、東京工業大学の前身）の拡張案が建議され、官立学校が皆無になった大阪でも、府市合同で官立工業学校誘置の運動を起したので、第九代文部大臣西園寺公望は、明治二十九年東京工業学校の拡張と共に、文部省直轄の大阪工業学校を玉江橋の南詰（ロイヤルホテルの東北隅）に開設した。当時田蓑橋の南詰に府立大阪医学校があり、中之島で隣接する橋の袂にある両校が、将来大阪帝国大学を形成する運命にあることを、誰が予想したであろうか。

第三高等中学校の京都移転以来、七年目に官立の学校が大阪に出現したのであるが、翌年九月には京都帝国大学理工科大学が開設され、大阪がまた一段京都から格差をつけられる結果となった。なお文部省直轄の東京工業学校と大阪工業学校は専門学校であったので、府県市立の工業学校と区別するために、明治三十四年からそれぞれ高等工業学校と改称された。

明治三十六年三月には、東京帝国大学総長から第十八代文部大臣となった菊池大麓は、専門学校令を公布し、高等教育機関を規程した。官公私立を問わず、東京帝国大学と京都帝国大学以外の高等教育機関はすべて専門学校とし、私立大学を名乗る早稲田、慶応、明治及び法政なども専門学校として認可されていたのである。

大阪では、明治三十六年四月先ず官立の大阪高等工業学校、次に同九月大阪府立医学校を改称して大阪府立高等医学校、翌明治三十七年三月には市立大阪商業学校を改称して市立大阪高等商業学校高等科、

さらに明治三十八年正月に関西法律学校を改称して関西大学の四校が専門学校として逐次認可された。時恰も日露戦争の最中であり、戦争終了後、勝利国日本の高等教育がさらに飛躍する。

㈣　大学昇格から帝国大学へ

京都帝国大学開設後、政府は地理的条件から東北と九州に帝国大学を設置する腹案を持つようになったが、札幌農学校（明治八年開設）を母胎として、北海道に帝国大学を設置する運動が起こり、明治三十四年に議会で承認された。しかるに日露の風雲急なために実現を見るに至らなかった。日露戦争終了後の明治四十年六月に札幌農学校は大学に昇格するけれども、東北帝国大学農科大学としてその本部が仙台に置かれ、北海道帝国大学は実現しなかった。なお仙台に理科大学が設置されたのは明治四十四年正月である。同時に九州帝国大学工科大学も開設され、三月には京都帝国大学福岡医科大学（明治三十六年三月設置）が自動的に九州帝国大学医科大学に移行する。

政府の腹案通りに四帝国大学が揃い、東京（法・医・工・文・理・農）、京都（理・工・法・医・文）、東北（農・理）、九州（工・医）の十五分科大学が明治の掉尾を飾ることになる。

大正時代に入ると、大阪府立高等医学校の名校長佐多愛彦が文部省の帝国大学令一辺倒に挑戦し、医科大学昇格運動を起こす。専門学校認可以来一・五年であった予科年限を、大正三（一九一四）年から三年に延長して、佐多校長は先ず既成事実を作り、翌年十月当時の文部大臣高田早苗（後に早稲田大学総長となる）に医科大学設立の認可をとって、大学令発布前に大阪府立医科大学の名称を先取りしたのである。

正式に大学令が公布されたのは大正七年末、中橋徳五郎文相の時代であるが、それに先立つ四月に東北帝国大学農科大学は北海道帝国大学農科大学と改称、北海道の宿願が漸く達成される。したがって大学令発布までに日本では五帝国大学以外に正式の大学は皆無であった。

大学令では単科大学、公（道・府・県）私立の大学が正式に認可されるようになったが、翌大正八年二月には帝国大学令も改正され、官立の総合大学を帝国大学と規程し、分科大学を学部に改めた。同時に東京に経済、九州に農、北海道に医の三学部を、五月には東北に工、京都に経済の二学部を設置した。十一月には大学令による認可第一号として、大阪医科大学（認可後大阪府立医科大学を改称）が正式に発足した。日本で最初の単科大学と公立大学の前例を築き、宿願の大学がいよいよ大阪に誕生したのである。後藤象二郎知事らが大学設立を天下に宣言してから丁度半世紀になる。

翌大正九年の二月には、慶応義塾（文・経・法・医）と早稲田（法・文・商・政経・理工）が大学令による最初の私立大学として発足する。四月には初の官立単科大学として東京商科大学（現一橋大学）が東京高等商業学校（明治八年森有礼が設立した商法講習所→明治十七年東京商業学校→明治二十年高等商業学校→明治三十五年東京高等商業学校）から昇格した。以下私立大学と官立医科大学が続々と認可されるようになった。

大学令と同時に新高等学校令も公布され、官立以外に公私立、並びに尋常科四年を擁する七年制高校の設置も可能となった。明治二十年以来肩を並べてきた第一～五高等学校であったが、明治三十三年に第六（岡山）と第七（鹿児島）、明治四十一年に第八（名古屋）高等学校の三校

を加え、明治時代の増設が終る。

大正時代の増設は新高等学校令の公布を契機として始まる。官立高等学校は大正八年から十二年までに十七校増設され、既設八校と併せて二十五校以上増えなかった。大阪高等学校は大正十年に設立された。第三高等中学校の京都移転以来三十二年ぶりで、大阪にも帝国大学への登竜門が開かれた。なおこの年末に大阪外国語学校が新設され、大阪高等工業学校と共に大阪における官立高等専門学校が一挙に三校となった。

官立二十五高校以外に、七年制の公立高等学校が三校、私立高等学校が四校、宮内省立の学習院高校を入れて八校が設置され、全国高校の総数は三十三校となった。七年制の府立浪速高等学校は大正十五年に設立され、後に大阪大学豊中学舎の根拠地となるのであるが、浪高は大阪府立医科大学予科が閉鎖後に転換したものと考えてよい。

大阪医科大学の認可に続いて、大阪では関西大学が初めて法文と経済の二学部を擁する私立総合大学として大正十一年に認可された。大阪市立高等商業学校は、大正十五年十二月に、大学令第五条の道府県制限を市まで拡大できるように改訂させ、昭和三（一九二八）年には大阪商科大学に昇格した。大阪市の迫力を示すものとして注目される。昭和四年には、東京高等工業学校と大阪高等工業学校が、揃って日本で最初の工業大学となった。なお同時に昇格したのは東京文理科大学（現筑波大学）、広島文理科大学（現広島大学）及び神戸商業大学（現神戸大学）である。

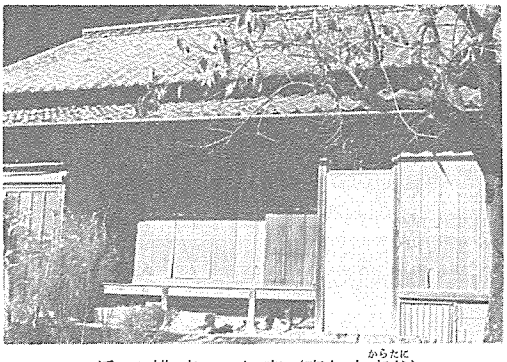
官立大阪工業大学の実現が確実となった昭和三年頃から、大阪府に官立総合大学設置の機運が台頭し、同年十二月大阪府会議長名で、府立医大、市立商大、官立工大の三大学を合併して、帝国大学を創立する意見書が内務及び文部大臣宛に提出された。翌年にも同様の意見書が提出されたが、市立商大が合併に難色を示していたので除外されている。また官立工大も昇格した直後であり、工大当局は総合大学への参加に消極的であった。しかるに工大の学生は帝国大学へ編入されることを熱望し、文部省へ直接行動をとることもあり、一時不穏な空気が流れた。

三　大阪帝国大学

(一)　その前夜

昭和四年七月着任したばかりの柴田善三郎大阪府知事と府立大阪医科大学楠本長三郎学長との間で、医科大学を府から国へ移管すると共に、理学部の設置を寄付で賄い、大阪帝国大学を創立しようということに意見が一致し、国立大阪工業大学を棚上げして、知事名で国立総合大学設置の上申書が昭和五年九月大蔵大臣井上準之助、内務大臣安達謙蔵及び文部大臣田中隆三宛に提出された。更に大阪工業会、大阪経済会、大阪商工会議所、その他有志の建議書が浜口雄幸首相及び関係閣僚宛に送付され、大阪帝国大学設立の機運が地元に漲ってきた。

浜口内閣は、前内閣（田本義一首相）のインフレ政策による不健全財政を是正するために、昭和五年一月金輸出を解禁し、デフレ政策と緊



浜口雄幸の生家（高知市唐谷）

縮財政により国際収支の健全化を図ったが、世界恐慌の直後でもあり、却って日本全国に不景気の波が押し寄せた。軍縮と平和路線を維持する政府は、四月にロンドン海軍条約を英米と締結したために、軍部の不興を買い苦境に立たざるを得なかった。そのような時期に新しい帝国大学を設立することは政府にとって大変な負担であったと思う。

柴田知事は大阪帝国大学創設案を塩見理化学研究所佐多理事長（大正十三年五月まで医大の初代学長）に示し、理学部設立に要する寄付を求め、同研究所から四十万円、医科大学から九十七万円、不用敷地売却による十七万円、大阪府から積立金三十一万円が提供された。合計百八十五万円を理学部創設に当て、医大の敷地、建物及び設備などを国へ移管する条件で、上申書を提出していたのである。十一月十四日には浜口首相が兇弾に斃れ、審議は進まず、年末に幣原喜重郎首相代理及び関係閣僚に対し、府会議長は従来の提案に加えて官立工業大学を将来工学部に編入する最初の意見書を提出した。

明けて昭和六（一九三一）年、衆議院で野党の政友会と貴族院の一部議員に、大阪帝国大学設立反対の空気が強かったのであるが、坂田幹太（大阪合同紡績役員、元愛知県知事、元高知市長、素粒子論学者故坂田昌一博士の父）と木間瀬策三（安治川土地株式会社常務、新潟県及び大阪府元内務部長、元富山県知事）両氏を筆頭に、多数有志の後援により、浜口首相、井上蔵相、田中文相らの支持を得て、三月二日の閣議に上程され、三月五日昭和六年度特別会計追加予算案として、大阪帝国大学予算案が政府から衆議院に提出された。

衆議院では、三月十八日の本会議で政友会の山崎達之輔代議士が峻烈に設立反対意見を開陳したが、浜口首相病軀を押して出席し、絶対多数の与党民政党の支持により可決、貴族院に回布された。二十二日の予算総会では紛糾し、翌日の総会で、大阪帝国大学創設案のうち府立大阪医科大学の国立移管を、既に提案されている県立愛知医科大学の国立移管と共に一括審議し、帝国大学案（理学部創設）だけを第三分科会（内務と文部関係）で慎重に検討することで落着した。しかるに二十五日の分科会でも難航し、大阪帝国大学創設案は学制の基本に触れるので、これに関する予算は認められるけれども、これを実行するには文政審議会の議を要するという付帯決議となったのである。この案が本会議に上程されたのは同日の午後九時二十分であり、結局委員会の原案が貴族院を通過したのは深夜の午後十一時三十五分であった。

文政審議会は新年度の四月九日首相官邸で開催された。審議会総裁の浜口首相は入院中のため欠席し、副総裁の田中文相以下四十二名が出席した。総裁と副総裁以外の委員は五十六名であり、委員構成は、各省次官、内閣書記官長と法制局長官、東京帝大と京都帝大の両総長、東京商大と東京文理大の両学長、第三高等学校、横浜高工と東京女高師の三校長、師範と中学校の各校長代表二名、学士院会員三名、貴衆

両院議員八名その他であった。

提出された諮詢は、第一、府立医大国立移管後昭和六年医学部開講、第二、官立工大移籍後昭和七年工学部開講、第三、創設後昭和八年理学部開講。

審議員のうち学校関係を除き十五名の委員を選び、四月十一日文相官邸で特別委員会が開催された。長時間討議の結果、将来文科系学部の増設には慎重を期し、他地方に創設活動が波及しないように、今後このような教育上重要な問題は予め文政審議会に付議されることを条件として、原案を可決し、四月十四日文政審議会本会議で諮詢の実行が答申された。時恰も浜口内閣が総辞職し、第二次若槻礼次郎内閣が発足する日であった。

留任の田中文相は四月二十日上奏御裁可を仰ぎ、勅許が得られた。正式に官制が発布されたのは四月三十日であり、難産の大阪帝国大学が産声をあげるその前夜であった。

要するに理学部の創設が大阪帝国大学設立の成否を支配していた。その温床となったのは府立大阪医科大学内で運営されていた財団法人塩見理化学研究所である。大阪医学校明治三十三年の出身ながら、お門違いの亜鉛製錬事業で産をなした塩見政次氏の遺志により、大正五年に寄付された百万円が研究所設立の基金となったのである。

府立大阪医科大学の佐多初代学長が所長となり、清水武雄（物理）、小倉金之助（数学）、古武弥四郎（生化学）の陣容で発足、東京の理化学研究所を参考にして運営されたと聞く。大阪帝国大学初代総長に長岡半太郎博士を迎えることが可能になったのは塩見理化学研究所の縁によるものである。生粋の実業家でもない奇特な一卒業生からの寄付が、帝国大学創設の導火線となったことに頭が下る。

(二) 開　学

昭和六年五月一日付で長岡半太郎総長、楠本長三郎医学部長、緒方十右衛門医学部付属病院長以下教官及び事務官の発令があり、その前夜から、田中文部大臣は赤間専門学務局長を帯同、長岡大阪帝国大学総長及び柴田大阪府知事と同車東京を発つ。五月一日午前八時五十六分大阪着、金森旅館に少憩の後、十時半開催の開学式に臨んだ。総長式辞及び文部大臣告辞があり、感激の式典は十一時半に終り、祝宴に入った。

翌二日午後二時四十四分大阪駅着の列車で、若槻首相来阪、出迎えの田中文相らと共に大学へ入る。午後三時五分より教職員学生に首相と文相の訓示があった。昭和になって最初に成立した帝国大学を政府が如何に重視していたかがわかる。浜口内閣の重要案件であっただけに、大阪帝国大学の開学を目前にして、遭難の傷遂に癒えず、ライオン宰相を迎えることができなくなったのは、当事者にとって心残りであったと思う。

記念すべき昭和六年ではあるが、政情は急に悪化してくる。六月から官吏減俸令（約一〇％削減）が実施され、八月浜口雄幸没す。九月には満州事変勃発、十二月若槻内閣総辞職、犬養毅政友会内閣成立、金輸出再禁止、昭和七年二月井上前蔵相、三月団琢磨共に血盟団員に射殺される。五月陸海軍青年将校らは首相官邸などを襲撃し、官邸で犬養首相を射殺する（五・一五事件）。以後政党内閣は消滅し、斎藤実海

軍大将が挙国一致内閣を組織した。

昭和七年十月東北帝国大学真島利行教授が兼任で大阪帝国大学理学部長に任命され、翌八年一月には阪大専任となる。四月から理学部が開講するので、大量の輸入人事が発令された。母胎の塩見理化学研究所から物理の岡谷辰治と浅田常三郎、並びに千谷利三の三教授が移行した。後にノーベル賞に輝く京都帝国大学の湯川秀樹講師が阪大講師として岡谷教授の講座に移籍したのもこの年の五月であった。

昭和七年合併される予定であった官立大阪工業大学は、昭和八年三月二十八日に廃止され、堤正義学長が大阪帝国大学工学部長となる。昭和八年卒業予定の大阪工業大学第二期生には卒業式を遅らせて四月にし、大阪帝国大学工学部第一期生として卒業させている。

昭和八年四月の入学式で初めて三学部が揃い、医学部九十七名、理学部四十三名、工学部百二十五名、合計二百六十五名が入学を宣誓したのである。学生にとって真の開学式はこの日といえよう。

(三) 戦前(昭和八～十六年)

発足当時の工学部は官立大阪工大の東野田学舎(大正十年高工時代に玉江橋から移転)をそのまま使用したが、理学部学舎は中之島の医学部学舎に隣接して昭和七年八月に起工、昭和九年三月に竣工している。その間理学部の教育と研究は医学部本館及び塩見理化学研究所で行われた。

昭和八年五月十日鳩山一郎文相が京都帝国大学滝川幸辰教授の休職を要求、同二十六日付で発令した。学問の自由を侵害したこの暴挙に対し、宮本法学部長を含む三十九人の教官が辞表を提出した。所謂滝川事件である。鳩山文相(昭和六年十二月～同九年三月)は田中前文相(昭和四年十一月～同六年十二月)の後任であるが、野党代議士として、大阪帝国大学の創設に反対した筆頭人であった。もしも本案の上程年度が一年遅れていたならば、大阪帝国大学の実現は不可能であったと思う。それだけに阪大実現に奮闘した田中隆三前文相の功績は大きい。

理科系だけの三学部しかない阪大では、このような政治思想的動揺とは係りあいがなく、長岡―ラサフォード(Rutherford)の原子模型で有名な長岡総長を戴くだけあって、特に物理学教室で世界を驚かす画期的な研究が密かに進行していたのである。

昭和九年弱冠二十六歳の湯川秀樹講師は、Heisenberg の核力を追求しているうちに、電子を媒介とする交換力だけで説明するには不充分となり、質量が電子と陽子の中間にある新粒子を導入して説明しようとした。この研究が日本数物学会誌(欧文)に掲載されたのは翌昭和十年であった。二年後米国のアンダーソン(Anderson)が宇宙線霧箱でこの粒子の存在を確認したので、世界がこの仮説を認めた。後に新粒子は中間子(meson)と呼ばれるようになり、素粒子研究に新分野を開く契機となった。

湯川講師は昭和十一年三月助教授に昇進、昭和十三年四月に学位を取得、昭和十四年五月京都帝国大学教授に栄転された。中間子の研究が学位論文から昭和十五年の学士院恩賜賞、昭和十八年の文化勲章、昭和二十四年に日本で最初のノーベル物理学賞と繋がるのであるから、大阪帝国大学創設の意義と存在が如何に重要であったかがわかる。

昭和九年三月には理学部本館が竣工したので、五月に三学部成立を

記念して、祝賀式と午餐会とが開催された。長岡総長は創成期の大任を果たしたので、六月に引退し、楠本医学部長が第二代総長となる。九月には、最初の新部局として、微生物病研究所が設立され、医学部の古武弥四郎教授が所長に就任した。

微生物病研究所設立の経緯は医科大学時代に溯る。楠本学長の要請により、昭和六年山口玄洞が二十万円を大阪府に寄付したが、医大が国へ移管されたので、大阪府が昭和八年から医学部付属病院東側にある大阪市所有の敷地に微研の建設を始め、昭和九年に落成した。建物は府から国へ寄付されたが、敷地を大阪市から購入したのは国であった。さらに、大正六年竹尾治右衛門の寄付金五十万円により設立された財団法人竹尾結核研究所、また昭和六年篤志家の寄付で開設された特殊皮膚病研究所を合併して、微生物病研究所が発足したのである。落成式を挙行したのは昭和十年五月であった。

昭和十一年には二・二六事件が勃発、斎藤実前首相、高橋是清蔵相らが射殺され、暗雲が低迷する世になってきたが、三月二十五日に大阪帝国大学では最初の三学部揃った二百三十八名が卒業した。医学部では、若き日の釜洞醇太郎（第九代総長）を含む九十四名、数学、物理及び化学三学科の理学部でも、第一期の若槻哲雄（第十代総長）を含む三十八名、工学部では機械、電気、応用化学、醸造、冶金及び造船の六学科百六名が卒業生の内訳である。

昭和十二年には理学部に財団法人谷口工業奨励会の寄付によるサイクロトロンが完成し、菊池正士教授（適塾出身菊池秋坪の孫、菊池大麓の子息）の原子核物理学の研究に貢献、阪大の名物となった。同年工学部にも航空学科の増設があり、当時東大以外に航空学科は無かったので、西の目玉となる。また第一室戸台風が刺戟となり、財団法人災害科学研究所が楠本総長を所長として同年工学部内に設立された。昭和十四年には災研の大風洞が完成し、航空研究にも活用された。同年工学部は精密工学科、翌昭和十五年に通信工学科を増設し、九学科に膨張、工学部の入学定員が初めて二百人を越すようになった。

昭和十六年には戦線が中国から仏印に波及し、日米間の雲行も怪しくなり、十月十六日付で大学学部等の在学または修業年限の臨時短縮が公布され、昭和十六年度卒業生は三カ月間、昭和十七年度卒業生は六カ月間短縮されることになった。やがて十二月八日未明、日本は米英に宣戦を布告し、太平洋戦争に突入したのである。

㈣　戦中戦後（昭和十七～二十二年）

阪大で第二番目の付置研究所として、昭和十四年十一月堺市に設置された産業科学研究所が、晴れて開所式を開催したのは昭和十七年九月であった。財界からの寄付金四百万円を基金として、昭和十三年に発足した財団法人産業科学研究協会（理事長、小倉正恒住友本社総理事）が、産研の土地及び建物に多大の貢献をしてきたのである。

産研創立以来真島元理学部長が所長事務取扱となっていたが、昭和十八年二月真島名誉教授は第三代総長になったので、直ちに鉛市太郎工学部長が正式に産研所長に補せられた。鉛教授は昭和十九年四月一日付で停年退官したので、産研所長を免ぜられ、引き続き同事務取扱を命ぜられた。

昭和十九年十月には工学部の冶金学科から分封して、世界で最初の

溶接工学科が発足し、阪大の名物となる。学科新設には、当時の岡田実教授（第八代総長）の要請により大阪電気の大西社長から五十万円の寄付があった。これで工学部は十学科に膨張した。

緒戦の優勢も束の間、昭和十七年十一月のミッドウエー海戦の敗北以後、戦況は急速に日本側の不利となり、やがて制空権を得た米軍の空襲が日本全土を覆うようになった。昭和二十年三月十四日の空襲では医学部の付属医学専門部（昭和十四年開設）の全建物を焼失、記念会館を仮校舎として教育を続けた。六月七日には工学部の木造建築全部とコンクリート建物の一部を消失し、大学院特研生一人が死亡した。

昭和二十年八月十五日終戦となる。九月には、敗戦で去脱状態になった社会へ、三百九十八名（内訳、理五十九、医九十四、工二百四十五）の三学部揃った第十一回目の卒業生が送り出された。この年度の卒業生から大学で研究を続けた者が最も多く出たといわれている。

十二月一日連合軍の指令により、理学部のサイクロトロンが破壊撤去された。この非文化的暴挙は米本国でも批判があったと聞く。阪大にとっては忘れ難い敗戦の痛手であった。翌年一月十日勅令により工学部の航空学科が廃止され、工業力学科と改装したが、一年後の昭和二十二年七月には構築工学科に改変し、結局航空学科は消滅するのであるが、後に大阪府立大学工学部で復活する。

昭和二十二年九月三十日、「帝国大学」が「国立総合大学」に改められ、明治十九年三月二日以来六十一年半続いた帝国大学の名称は日本から永遠に消え去る。大阪帝国大学の名はわずか十六年で消えたが、大阪大学の名は永遠に続くことであろう。

四　大阪大学

㈠　旧制から新制へ

溯れば昭和二十一年二月真島総長退官後、第四代総長として八木秀次技術院総裁（第二代阪大理学部長、昭和十七年三月～十九年十一月東京工大学長、八木アンテナで世界的に有名）が迎えられたが、僅か十カ月後に退官、昭和二十一年十二月から医学部の今村荒男教授が第五代総長に就任し、転換期の阪大建設に当ったのである。

大阪大学となった初年度の昭和二十三年九月に法文学部が設置された。阪大のみならず、国立理科系総合大学の北海道と名古屋と共に、新制大学移行前の白線浪人救済が目的であったようである。最初今村総長が法文学部長を代行していたが、東京大学の桑田芳蔵名誉教授が学部長に任命された。新設学科では当時五年間停年制が猶予されていたのである。

大阪府立浪速高等学校は国へ移管される予定となっていたので、大阪府の諒解のもとに尋常科の建物を法文学部仮教室とした。最初の入学生は百三十二名（内訳、文四十、法四十五、経四十七）である。因に同年の阪大入学生は六百七名（内訳、理七十五、医九十八、工三百二、法文百三十二）であった。

学制改革により昭和二十四年六月から新制大学が発足する。待兼山の府立浪速高等学校は、中百舌鳥の国立大阪工業専門学校と交換、大阪大学に併合されて豊中学舎となり、後者は大阪府立（浪速）大学の母

胎となった。大阪高等学校も阪大に包括され、浪高を北校、大高を南校と称し、阪大教養部を形成する。初代教養部長は後に第七代総長となる赤堀四郎教授であった。新制第一回の入学者は九百十八名（内訳、文六十二、法経百四十二、理百十六、医薬二百二、工三百九十六）であったが、同年度の旧制入学者が七百七十三名であったので、一年に千六百九十一名の入学者を抱えることになった。

この年に私立大阪薬学専門学校（豊中市蛍ヶ池）も大阪大学に併合され、医学部薬学科となったが、薬専の在校生を収容するために、付属薬学専門部を暫定的に付置した。いっぽう理学部には待望の生物学科が新設され、四学科となった。また法文学部は文学部と法経学部にわかれ、桑田法文学部長が文学部長に留まり、法経学部長には小野木常教授が発令された。

同年十二月に、懐徳堂記念会から、蔵書三万六千冊が文学部に寄贈された。懐徳堂は、享保九（一七二四）年中井甃庵が、鴻池屋又四郎他豪商五名の援助を受け、彼の師三宅石庵のために建てた漢学塾である。二年後には幕府公認の半官立大坂学問所に昇格した。時に官学湯島昌平黌の設立より遅れること三十七年であった。甃庵が二代目学主を継ぎ、その子息竹山と履軒の代となり黄金時代を築き、江戸の昌平黌を凌ぐ勢であったといわれている。竹山は朱子学派であったが、履軒はかなり開放的であったようである。

明治二（一八六九）年に閉鎖されるまで百四十六年、町人学校として市民に解放され、商都大坂の文教に多大の貢献をした。大阪大学に文科系学部が開設される以前に、公私立大学の文科系学部が大阪に存在していたのであるから、敢て阪大が懐徳堂文庫の受皿になることを銘記せねばならないと思う。

昭和二十五年度から、医学部に注目の歯学科が増設され、同年度に全学で新制九百四十名と旧制最後の九百五十三名、計千八百九十三名が入学した。六月二十五日には朝鮮戦争が勃発、敗戦後日本が工業国家へ脱皮し、やがて経済大国へ発展する転機が訪れる年であった。

(二) 新制大阪大学

昭和二十六年三月附属医学専門部と薬学専門部は廃止されたが、歯学部が設置され、弓倉繁家教授が初代歯学部長となる。また微生物病研究所にも附属病院が開設された。三月末には義宮正仁親王が理学部を視察、六月に吉田茂首相が医学部を来訪する。

昭和二十八年新制の第一回生として六百十五名が卒業し、開設早々の大学院修士課程へ百五十二名が進学した。八月には法経学部が法学部と経済学部に分離、大阪谷公雄教授と高田保馬教授がそれぞれ初代学部長となる。

昭和二十九年には理学部にサイクロトロンが再建され、終戦後の悪夢から愁眉を開く。翌年ベータートロンも完成された。なお薬学部が医学部から独立したのも昭和三十年であった。

昭和三十年以後新設された部局及び初代の部局長を列記すると、昭和三十三年蛋白質研究所（赤堀四郎理学部教授）、昭和三十六年基礎工学部（正田建次郎元第六代総長）、昭和四十一年社会経済研究所（安井琢磨経済学部教授）、昭和四十七年文学部から分離した人間科学部（田中正吾文学部教授）、同年溶接工学研究所（木原博工学部教授）、昭和四十九年教養

部から分離した言語文化部（中川努教養部教授）など、特異な研究所、奇抜な名称の学部が陸続として開設された。

全国共同利用施設として、昭和四十六年開設された核物理研究センターは、戦前から苦難の道を歩み続けてきたサイクロトロン阪大の伝統が結実したものといえる。学内共同利用施設として、昭和四十九年設置の超高圧電子顕微鏡センター、昭和五十一年設立のレーザー核融合研究センターは、大阪大学の名物となっている。

昭和三十年以後、高度成長の波に乗って増設された学科を網羅すると、昭和三十二年の工学研究科原子力工学専攻を皮切りに、工学部では、電子工学科（昭和三十三年）、原子力工学科（三十七年）、応用物理学科（三十八年）、構築工学科の土木工学科と建築工学科への分離、産業機械工学科（四十一年）、環境工学科（四十三年）、冶金・金属材料工学科の分離（五十年）。基礎工学部では、制御工学科と材料工学科（三十七年）、化学工学科（三十八年）、情報工学科（四十五年）。その他薬学部製薬化学科（三十七年）、経済学部経営学科（四十年）、文学部美学科（四十八年）となる。

新しい構想の独立専攻として、文学研究科日本学専攻（昭和五十年）経済学研究科公共経済学専攻、工学研究科では、プロセス工学専攻（五十一年）と電磁エネルギー工学専攻（五十四年）。医学研究科では医科学専攻（五十四年）など、学部の学科と繋りのない専攻が発足した。

昭和四十年代の学舎移転は見事なものであった。昭和三十六年九月の第二室戸台風で水浸の大被害をうけた理学部は、豊中キャンパスへの移転を決意し、基礎工学部に隣接して、昭和四十年七月に竣工の新学舎へ移転した。

吹田キャンパスでは、昭和四十三年三月微研及びその附属病院、十月には産研が竣工した。工学部は昭和四十三年から四十五年にかけて吹田移転を完了した。その間大学紛争による封鎖もあったが、隣接の万国博が開幕する頃には、悪夢も去り、吹田キャンパスも開花した。その後蛋白研（昭和四十六年）、核物理センター（四十九年）、薬学部と人間科学部（五十年）、社研（五十三年）、本部（五十五年）が移転し、阪大の中心が吹田へ移る。

この時点で大阪大学の人口は学生数一万千七百九十七名（学部九千三百八十三、大学院二千四百十四）、教職員四千五百八十八名（教員二千二百十一、職員二千三百七十七）、総数一万六千三百八十五名の大世帯に発展したのが阪大五十年目の姿なのである。

五　おわりに

旧帝国大学の設立はほとんど天下りであったが、北大や阪大は政府の意志を上回る地元の要望により開設されたものである。それだけに産みの悩みにまつわるドラマが豊富となる。特に京都に近い大阪で帝国大学を設置することに、中央の政界が快く思うはずがない。平和主義の浜口内閣であったからこそ、緊縮政策を堅持しながらも、文教を尊重しえたものと思う。

知られざる歴史を掘り出すために、創立五十年の略史とはならず、天保九（一八三八）年の適塾発祥から今日（一九八一）に至るまでの百四

年間のうちで、阪大の前史に重点が置かれる結果となった。

創成期の理学部物理学教室では、六年間在籍した若い教官の湯川秀樹を中心として、世界をリードする素粒子論グループが形成され、日本で初のノーベル賞に至ったことからも、阪大創設の意義が如何に重要であったかが窺われる。

創立五十年、阪大関係の文化勲章受章者の数は比較的に多く、物理学六、化学三、数学一、経済学二、医学一の合計十三件であり、大阪大学のレベルを示している。

騒然とした大阪ではあるが、無心に学問しうる土壌が、福翁の所謂「適塾魂」を育てたのであり、末永く大阪大学の学風として流れ続けることを念願するとともに、開かれた大学として、大阪大学は、庶民の生涯教育に、「懐徳堂精神」を活かせねばならないと思う。

〔参考文献〕

1 文部省、『学制百年史』
2 文部省、『目で見る教育一〇〇年のあゆみ』
3 大阪大学、『大阪大学二十五年誌』
4 大阪大学、『大阪大学一覧』
5 大阪大学医学伝習百年記念会、『百年史年表』
6 財界評論社、『大阪大学工学部七十五年史』
7 西尾幾治編、『大阪帝国大学創立史』
8 五十年史資料・編集室、『大阪大学史紀要第一号』
9 梅根悟監修、『大学史』、世界教育史大系
10 佐藤誠実、『日本教育史(2)』、東洋文庫
11 永井道雄、『日本の大学』、中公新書
12 天野郁夫、『旧制専門学校』、日経新書
13 朝日ジャーナル編集部、『大学の庭』
14 中野　操、『大坂蘭学史話』、思文閣出版
15 緒方富雄、『緒方洪庵伝』、岩波書店
16 藤野恒三郎監修、『緒方洪庵と適塾』
17 伴　忠康、『適塾をめぐる人々』、創元社
18 伴　忠康、『高松凌雲と適塾』、春秋社
19 福沢諭吉、『福翁自伝』、岩波文庫
20 会田倉吉、『福沢諭吉』、吉川弘文館
21 小泉信三、『福沢諭吉』、岩波新書
22 江藤　淳、『明治の群像』、新潮社
23 難波宮址を守る会、『難波宮と日本古代国家』、塙書房
24 山根徳太郎、『難波の宮』、学生社
25 井上　薫編、『大阪の歴史』、創元社
26 原田伴彦、矢守一彦、『浪華大坂』、講談社
27 司馬遼太郎、『花神』、新潮文庫
28 絲屋寿雄、『大村益次郎』、中公新書
29 岡田、豊田、和歌森、『日本の歴史』、読売新聞社
30 歴史学研究会、『日本史年表』、岩波書店

（みたに　ひろやす　高知工業高等専門学校長
大阪大学名誉教授）